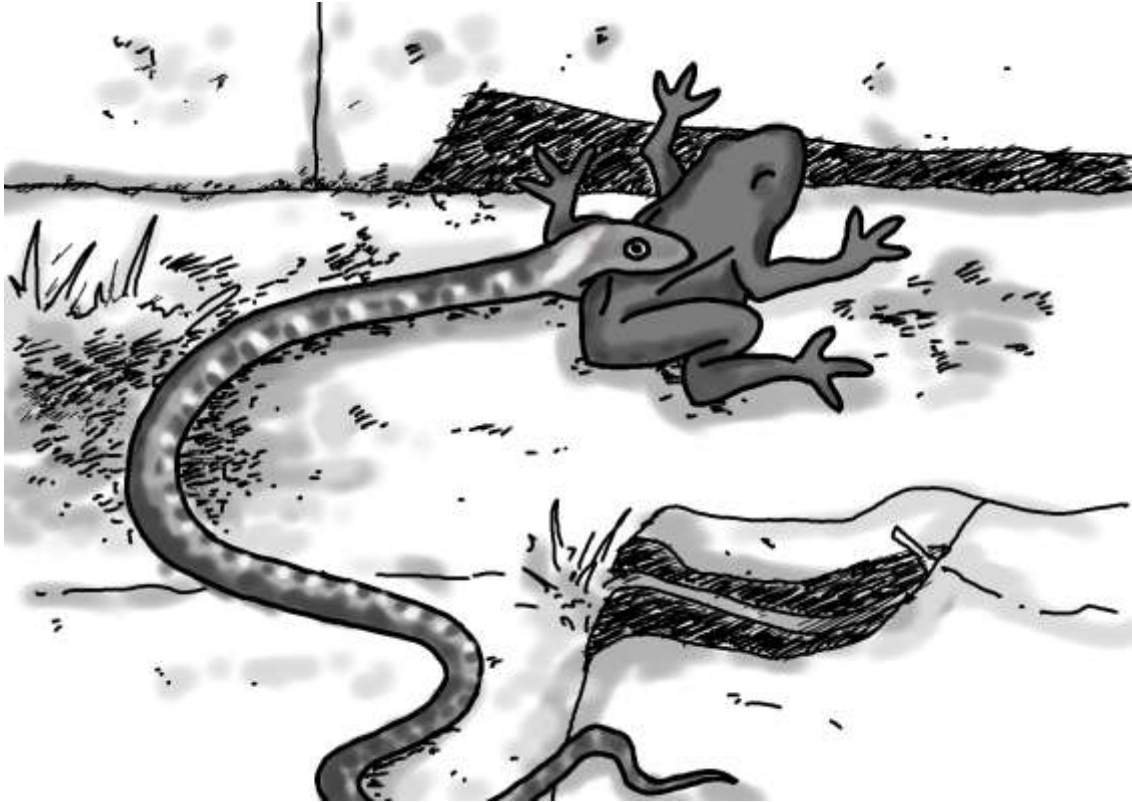


# 花ちゃん、オー君、モンタ博士のわくわくドキドキ冒険記2

国立市立国立第七小学校

平成26年6月5日 NO.22 (122)



花ちゃん 「キャーッ！こわーい！」

オー君 「どうしたの？花ちゃん。ヘビがカエルにかみついているだけじゃなか。それが、どうかしたの？」

花ちゃん 「ねえ、オー君。こわくないの。」

オー君 「なに言っているんだよ。ぼくたち人間（にんげん）の知（し）らないところで、生き物どうしの食（く）うか食われるかとの戦（たたか）いは、いつもあちこちであるんだよ。そうですよね。モンタ博士。」

モンタ博士「そうだね。ふだんはなかなか見ることができないものだね。ところで、この絵（え）はとってもしょうずにかいてあるけど、だれがかいたの。いつもちがう絵だね。」

モンタ友人「わたしです。この前、おうちの近（ちか）くに行（い）った時（とき）に、ぐうぜん見てしまったんです。」

オー君 「カエルの体（からだ）に、ガバッと大きな口をあけてかみついているんです

ね。すっごい迫力（はくりょく）ですね。」

花ちゃん 「ヘビは自分（じぶん）よりも体（からだ）の大きなものでも、アゴの骨（ほね）をはずすようにしてかみつくとある本にあったけど、本当なんですね。」

モンタ博士 「なかなかそんなチャンスはないからね。モンタ博士もあちこちてくてくしているけど、今までに1回（かい）しか見てないもんね。こんどは、ぜひ写真（しゃしん）をとっておいてちょうだいね。」

花ちゃん 「私、カエルがかわいそうだし、ヘビなんていなくなればいいと思います。」

オー君 「でも、ヘビがいなくなったら、カエルがふえたりしないかな。」

モンタ博士 「なるほど、では、ここで問題（もんだい）だ。もし絶滅（ぜつめつ）するとしたら、ヘビ？カエルかな？どっちだと思う。」

花ちゃん 「いつもにらまれるカエルかな。」

オー君 「いつもいばっているヘビかな。」



モンタ博士 「動物（どうぶつ）の研究（けんきゅう）で、ノーベル賞（しょう）をもらったコンラート・ローレンツ博士という人がいるけどね。ヘビが増（ふ）えすぎるとカエルをどんどん食べてカエルが減（へ）るんだ。そして、カエルの数が十分の一以下（いか）になると、もはやヘビはえさのカエルを探（さが）せなくなる。そこで、いばっているヘビが最初（さいしょ）にだめになるそうなんだ。これが自然界（しぜんかい）の姿（すがた）なんだよ。」

オー君 「ふーん。なるほど。強（つよ）い方が先（さき）にダメになるということなのか。」

モンタ博士 「そうだね。実際（じっさい）には、ヘビが減ればカエルが増えて、カエルが増えればまたヘビが増え、ヘビが増えればカエルが減るんだ。」

花ちゃん 「自然界のバランスというのはうまくできていて、両方とも絶滅（ぜつめつ）しないのね。」

### いばっている者こそ謙虚さを忘れないで！

今、私たち人類は、食う者と食われる者との立場を表す、食べ物でつながっている一つの鎖…食物連鎖…の頂点に立って、一番いばってあらゆる欲望を満足させようとしている、人口が倍々ゲームのように増えて、まるで人類が地球上を制覇したような気分になっている。しかし、自然界のエネルギーの流れから見た生態系の中で、緑の植物が生産者であるのに対して、人間が消費者の立場、寄生虫の立場にいる以上、緑…それが立体的につままっている森を食い尽くした時に最初にダメになる、最初に破滅する、最初に絶滅するのは、自然界を取り巻く生態系の図式から見れば、実は、人間の方なのであることをしっかりと認識しなければならない。